

其後強大な横壓力は日本海の方から押寄せて來て、群島は弓狀に折曲げられた。其時敦賀―伊勢線の大きな島弧を横斷する岬裂線が出来た。東には富士帯岬裂線或は相模・富山兩灣を運んだ線も出来た。

若狹灣内にも其と同性質の線が出来た、そして遠くは北但馬の方へも餘波を及ぼした、敦賀―伊勢灣線は琵琶湖の東岸をなし、敦賀―大津線は湖の西岸をなし共に大變動の跡が判然と見える、それが又京都盆地の成因に關係しては大

峰線となる。北但馬の方面からは北西・南東の線となつては京都盆地の西龜岡盆地をなし、京都盆地の主因ともなつてゐる。若狹・北但馬・琵琶湖の線を綜合すれば丁度近畿の中心點の處に集つて扇の要の處には京都の盆地が出来てゐる。

前にも述べた様に、京都盆地は三角形を爲すと言つた。即ち若狹灣・北但馬・琵琶湖の大變動は該中心地點に集積して其交叉した處に三角形の盆地を作つた事と思はれる。(十四・十七・十八)

宇治の景觀

(圖版第二版付)

上治寅次郎

山門をでれば日本の茶摘歌、これは禪宗の本山、黄檗山萬福寺の堂坊伽藍が支那趣味に満ちたことゝその附近の茶園の春景とを歌つたものである。歴史の傳へる處によれば、寺の開祖隱

元は支那福州の人、承應三年來朝して長崎に居り、其後、徳川將軍家綱より地を山城宇治に賜ひて伽藍を建立す、即ち福州の黄檗に擬して黄檗山萬福寺と號すと。隱元のこの地を選びし理

由はそも那邊に存せしか。若しそれ、川に臨み山を負ひ、山水明媚の地を選ばんには宇治川畔に猶好適地なきにあらざらむ。

眼を萬福寺の東方に轉すれば、高峰山より南に走る二三百米に及ぶ一帯の山地がある。山地は秩父古生層に屬する粘板岩硬砂岩角岩の互層よりなり、薄き粘板岩を介有する硬砂岩層は最も厚く、七百米にも達する厚層をなし、著しく風化してゐる。もし、山上に登つて南及東南を望まば赭色に禿げたる山頂と、その崩壊甚しきことが眼に映するであらう。この崩壊せる山地は風化せる硬砂岩帯に外ならぬのである。近年崩壊防止のため處々に砂防工事の行はれつゝあり。黄檗に遊ばん人々よ、その東方山地のバツドランドの禿山の風景を見ることを忘れ給ふな。而してその殺風景を眩くなかれ、黄檗山萬福寺の支那風と、東方山地の風景との調和は、支那趣味の高調に價值少なからざるものがあるが故に。(第二版上圖參照)

宇治は茶どころ、その産額は近來、静岡三重

に及ばざること遠しといへど、其の名は昔と變ることなし。それ陽春の候、山麓の傾斜地に日覆を施せる茶園は、柔かき嫩芽を以て玉露茶を製せんための手段である。覆下茶園と茶摘歌、これ宇治のあたりの春の景趣。

山城盆地の中央に、今は昔の影を止めざるまでに面積を縮少せる巨椋の大池、池畔は蘆荻茂りて、水淺くまさに老年期に入れる湖沼である。この巨椋池畔に發達する沖積低地と東方古生層山地との間に、山地の端を縁とりて、或は廣き、或は狹き一帯の傾斜地がある。傾斜地は主として古生層岩石の砂礫より成る洪積礫層と其の崩壊物よりなる扇狀地又は段丘とによつてつくられる。礫層は多く壤土を混じ、茶樹栽培に適し、宇治附近の茶園は、殆ど一つの例外もなくこの礫層地を利用してゐるのである。かの静岡の茶園が牧の原礫層地に發達するのと比すべき關係である。

郷の口といふ山間の部落を要とし、西北は宇治町、西南は長池の南方に至る扇形の洪積礫層

「宇治層」は厚さ百二十米、郷の口の西方では標高二百六十米にも及ぶが、西に向つて漸次に低く、遂に沖積低地に終つてゐる。この礫層の東部は天然のまゝに崩壊にまかせ、不毛の荒地をなし、又は瘠せ小松、疎に生じて、野砲兵の射的演習地となり砲車と馬蹄の蹂躪にまかされてゐる。近來、砂防扞止のため一部は國有林として植林されつゝあり。かの八軒家國有林即ちこれである。礫層の崩壊物によつてつくられたる二次的の扇狀地や谿谷の砂地は壤土全くなく漸く人造肥料を施して果樹園とされてゐる。桃杏の産額は年と共に増加の趨勢にあつて、扇狀地の南方、久世町の東方に於て特に發達してゐる。

宇治層——これは舊宇治川扇狀地の堆積物である。滄桑幾度か變じ、河道にも大變遷があつて、舊宇治川の河道は北轉して現今の河道をとる様になつた。宇治橋上に立つて東南を望めば、深緑の老樹に包まれた古生層の横尾山と朝日山續きの山地との間に峽谷をつくれる宇治の清流が眺められる。(第二版下圖)谷底削磨を逞しく

しつゝ山地を辭した宇治川は低地に下ると共にロードの堆積を始め横尾山西方より河床中に浮島、塔ヶ島其他のデルタをつくりつゝあり。その昔、巨椋池の面積、更に大にして、今の宇治町西部にまでも及べる頃の宇治は、東は山、西は大池、その間に挟まれる僅少の低地にあつて、南、奈良より、北、京都に至る間の軍事、交通の要衝を握つてゐたのである。佐々木高綱の先陣に知らるゝ宇治川、今は工兵の架橋演習に昔を偲び、鳳凰堂、興聖寺、浮島十三重塔は昔ながらに宇治を詩化してゐるのである。